〈研究ノート〉

文部省唱歌『ふるさと』100年の変遷を辿る

宮島　幸子、伏見　強

日本人なら誰でも知っている文部省唱歌『ふるさと』は尋常小学校で児童に歌われ始めて今年で100年になる。1914年（大正3年）という年になぜ文部省唱歌として尋常小学唱歌集6年生用に掲載されたのか。社会状況が目まぐるしく変化する中で100年経てもなおも歌い続けられる文部省唱歌『ふるさと』について、時代と『ふるさと』の変遷を辿り、文部省唱歌『ふるさと』を歌う意味、役割を考察した。

キーワード：文部省唱歌、ふるさと、アイデンティティ、応援歌

1. はじめに

東日本大震災直後から、被災者の方々の現状がマス・メディアを通じて多く取り上げられている。復興の見通しがつかない地域、放射能汚染により帰りたくても帰れない地域の人々にとってふるさとは思いを馳せるほどに大きく膨らむ存在であることが伝わってくる。

震災後、ふるさとという言葉が頻繁に聞かれるようになり、ニュースなどでクローズアップされるようになった。人々にとって生まれ育ち、生活の基盤がある場所は「私は何者か」に繋がる大切な場所である。

2014年8月12日朝のNHKニュースで、文部省唱歌『ふるさと』が100年をむかえたこと、『ふるさと』が東日本大震災の被災者の気持ちと重なって「この歌を聞くと絶対ふるさとに帰れる」と希望を持って避難所生活を過ごしている様子が放映されていた。この映像から『ふるさと』は被災者の方々にとって応援歌の役割を担っていることがわかる。

『ふるさと』は、おそらく、老若男女を問わず、日本人だったら誰でも知っている歌の一つであろう。今日においても音楽会のプログラム、イベントのプログラムなどでよく目にする。

『ふるさと』を人々はどんな気持ちで歌い、そして聴いているのだろうか。社会状況が目まぐるしく変化する中で100年経ても、なおも歌い続けられる『ふるさと』について、時代的背景とともに『ふるさと』の変遷を辿っていく。

2. 文部省唱歌『ふるさと』誕生の時代的背景

『ふるさと』が誕生した1914年は東京駅が完成した年であり、第一次世界大戦が勃発した年でもある。音楽の世界では、宝塚少女歌劇の第1回公演、ヤマハがハーモニカの製造を開始、劇中歌『カチューシャの唄』が流行した。この時代は中山晋平、野口雨情、北原白秋、本居長世、成田為三、弘田竜太郎、山田耕作、邦楽界では宮城道夫などが活躍し、今もなお誰もが知っている「懐かしい日本の歌」を残した時代である。また、明治期に始まった近代教育の中に西洋音楽を導入しようと試みたいわば、和洋音楽の融合による新しい日本音楽の夜明けの時代でもある[1)]。

では、なぜこの時期に文部省は小学6年生用

の教材曲として『ふるさと』を掲載したのであろうか。

教師に向けた指導書『尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釈』には「小学校生徒は遊学して居る時代でないから故郷という題目は了解に苦しむだろうと云ふ人もあろうが、我現在成長しつつある処即ち故郷は此の如く懐しいものであると云う感じを吹き込むつもりで作ったのである。郷土を愛するの念は、これ国家を愛するの念なり。郷土を思うの念は郷土を離れて始めて沁みじみと感じられる思ひである。郷土を離れたものの愛郷の情を想像させることは訓育上智育上格好の教材ではあるまいか」[2]と著者の福井直秋は述べている。

要するに、小学生という年齢では理解しにくいかもしれないということは分かったうえで、故郷や国を愛する気持ちを育てることが目的で選曲したということである。第一次世界大戦が勃発した年ということからしても納得できる。それは、1914年刊行した6学年用の唱歌教科書の目次の配列からしても理解できることである[3]。

3. 文部省唱歌『ふるさと』の変遷

明治以降の音楽教育について語るとき、「唱歌」と「童謡」の違いを述べなくてはならないが、ここでは本テーマである「唱歌」について述べることにする。

「唱歌」は1872年近代学校制度が制定され、小学校の教科に「唱歌」が制定されるところから始まった。

文部省は1881年から1884年にかけて3篇の『小学唱歌集』刊行し、1885年には、小学校教員に唱歌とオルガンを教える唱歌教習所もでき、徐々に全国の学校教育の現場で唱歌はオルガンの伴奏で歌われるようになる。その頃は、ほとんど外国の曲に日本語の歌詞をつけ歌われていた。

ところが、1911年から順次刊行が決まった教科書『尋常小学唱歌第1－6学年用』は、文部省が東京音楽学校に編集を依頼し、それにより構成された編集委員会の合議により全曲の作詞、作曲が行われ、学年別に構成された[4]。ということは、この時期に日本人が作詞作曲した国産の唱歌が学校で歌われるという、唱歌教育の歴史に画期的な意義を見出すことのできる時期に『ふるさと』が第6学年用教材として掲載されたことになる。

その後も第6学年用教材として掲載されるが、昭和16年から昭和22年の尋常小学校から国民学校に改組された時期の、昭和17年から昭和21年の間、国民学校初等科第6学年用『初等科音楽』には掲載されていない。しかし、昭和22年からは『6年生の音楽』教科書に再び採用されて現在に至っている。

このように『ふるさと』は文部省唱歌として教科書に載らない時期もあったにもかかわらず、それを機に消えることもなく復活し、今に歌い継がれているという数奇な運命を辿った歌といえる。

また、ここで特筆すべきこととして、小学校が国民学校になった時期、教科目名が「唱歌」から「音楽」に、そして、戦後『故郷』が『ふるさと』に変更された。また、文部省はマッカーサー元帥の指令により昭和22年に音楽教科書に作詞者と作曲者の名前を明記するようになった[5]。この時点で『ふるさと』の役割や、あるべき姿が、当初の目的とは変わったと考えてもよいのではなかろうか。

第一世界大戦勃発の年に文部省唱歌として児童に歌わせた『故郷』が第二次世界大戦下国民学校では教科書に載らなかった理由はなにを意味しているのだろうか。国民学校時代、教科書

に載らなかった理由は諸説述べた書物[6]があるが、第一次世界大戦下に教科書に掲載され、第二次世界大戦下では削除されたという、その背景にある『ふるさと』の存在意義についての時代的比較の研究書は見当たらない。これについては今後の課題としたい。

『ふるさと』は今では唱歌の代表的な曲としてふるさとを思い浮かべる人も少なくないとおもわれる。しかし、教育社会学者の西島央が、昭和初年に学校で唱歌教育を受けた世代に対し「当時好きだった唱歌」について行ったアンケート調査では、『春の小川』『おぼろ月夜』『港』『我は海の子』それから『荒城の月』『鎌倉』と回答し、『故郷』は「好きだった唱歌」に入っていなかった[7]。これは上記で述べた教師に向けた指導書『尋常小学唱歌伴奏楽譜歌詞評釈』著者の福井直秋が評釈した通りの結果であるといえる。現在では「唱歌では何が好き」というアンケートがあると、『ふるさと』は必ずベストテンに入るほど愛唱されている[8]と『童謡唱歌の故郷を歩く』で井筒清次は述べている。学生から協力を得て実施した「海外に紹介したい日本音楽」アンケートにも5位のなかに入っている[9]。

4.『ふるさと』に込めたおもい

『ふるさと』の歌詞

1. 兎追いし　かの山、小鮒釣りし　かの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷
2. 如何にいます父母、恙なしや友がき、雨に風につけても、思い出ずる故郷
3. 志をはたして、いつの日にか帰らん、山は青き故郷　水は清き故郷

には、「忘れがたき故郷」「思い出ずる故郷」「山は青き故郷」「水は清き故郷」・・・故郷への憧憬の念が切々と語られている。これを作詞したのは国文学者の高野辰之である。高野が長野から上京して16年経ってのことである。『ふるさと』の作詞を含む、高野の周りに起きた出来事をノンフィクションで、小説にもなった『唱歌誕生ふるさとを作った男』から高野の生涯がみえてくる。家族のことも含めてどんな幼少時代を過ごし、どんな人々と出会い、『ふるさと』作詞に至るまでの経緯を知ることが出来る。すると、「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」「如何にいます父母、恙なしや友がき」「志をはたして、いつの日にか帰らん」と作詞した高野の人生と高野が生きた社会的背景から、当時のふるさとのあり様がみえてくる[10]。

高野が教えた大正大学で1997年、没後50年のシンポジウムが行われた。『日本の唱歌』を編集した国語学者の金田一晴彦は「日本人に、日本に生まれてよかった….という自覚を持たせた詩人といったら、私は高野辰之博士が一番だと思う」と高野をたたえた[11]。

刊行当初、文部省唱歌は作詞作曲不明と記されていたが、『ふるさと』は文部省唱歌教科書編集委員だった高野辰之が作詞、同じく編集委員だった岡野貞一が作曲したといわれている。

作詞者である高野辰之は長野県出身である。「兎追いし」という歌詞は高野の時代は実際に学校の伝統行事であり、みんなでマントを着て、手をつなぎ輪になって大声を上げながら雪の山を登る。驚いた兎を追い込み捕まえる。兎鍋にして学校の校庭で食したとのこと。その頃は大事なタンパク源でもあった。おそらく高野は作詞にあたって幼少のころの思い出深い学校での行事、級友と鍋を囲んで食べた兎鍋は懐かしさが溢れる出来事だったのであろう。「小鮒釣りし」は子供のころ友達と近くの川で遊んだ楽しい思い出の一つとおもわれる。

「かの山」は高野が生まれ育った現在の飯田市にある実家から見える大持山と大平山ではない

かといわれ、「かの川」は高野の生家の近くにある真宝寺のわきを流れる班川をさしているのではないかといわれている。班川は幅3メートルほどの清流で、千曲川に注ぐ。高野が子供のころはカジカやヤマメなど、清流にしか棲まない川魚がたくさんいたという。しかし『ふるさと』の歌詞は「小鮒釣りし」である。このことに関して、「高野辰之記念館元館長の高野さんは日本で一般的に釣りとなるとフナが思い浮かぶため、唱歌ではフナにしたのでしょう」[11]と述べている。金田一晴彦は『日本の唱歌〈中〉』のなかで、「「兎追いし」「小鮒釣りし」などの具体的な叙述にあわせて、ふるさとを懐かしむという日本人に何より嬉しい思想が人気を博した所以である。」[12]と述べている。

また、『故郷』のゆったりした3拍子のリズムは讃美歌を受け継いでいる」が、「宣教師が讃美歌を普及させてアジア各国では伝統的な歌が駆逐されたが、日本では讃美歌の影響を受けながら唱歌という新しい形の歌を誕生させた」と唱歌の研究家、奈良教育大の安田寛教授は当時の音楽教育を評価する。讃美歌が賛美するのは神だが、日本で伝統的に賛美されてきたのは自然だ。童謡「サッちゃん」を作詞した故坂田寛夫さんは講演で「キリスト教徒の岡野貞一は唱歌で自然讃美歌を仕上げた」と述べた。私たちは『ふるさと』を歌いながら、自然を賛美しているのかもしれない[11]。

5. 『ふるさと』をうたう

作詞者高野の母校、永田小学校は第二の校歌として『ふるさと』が児童たちに歌い継がれている。始業式や終業式のほか、2週間に一度の音楽集会で全校生徒が音楽室に集まって『ふるさと』をうたう。年に1回、地域の人々を招いて開く学校の音楽会でも、最後に全員で『ふるさと』を歌う。長野県では今も飲み会や結婚式で『ふるさと』を歌う。

作曲者岡野の母校、鳥取市久松小学校でも歌い継ぐ。同校のすぐ前に『ふるさと』の歌碑があり、児童はこれを見ながら登下校する。近くの文化施設「わらべ館」には岡野の業績が常設展示され、3年生が総合学習の授業で見学に行く[11]。

子供のころの体験や育った地域の風景は人間形成の原点になる。高野の母校に通う児童たちも岡野の母校に通う児童たちも、『ふるさと』は校歌に並ぶ自分たちのオリジナリティ溢れる歌として歌われていくことだろう。

『ふるさと』は徐々に心のふるさと的な歌、人生の応援歌的な歌として、公の場で、演奏曲目の1つとして歌われている。

世界3大テノールの一人、プラシド・ドミンゴは東日本大震災直後の4月に来日、公演のアンコールに『ふるさと』を日本語で朗々と歌い上げた。会場からはスタンディング・オベーションがおこった。日本人の演奏会のあり方としては珍しい光景であった。ドミンゴは歌の力を信じ、大震災の犠牲者追悼と復興への祈りを込めて、「一時でも辛さを考えずにすむ時間を持っていただけたらと願っています」とコメントした。

歌う前に「慰めの機会を持ちたいと思い、幸い私たちは今皆さんの心と魂に届け物ができます。ですから日本の歌を贈ります。みなさんご存知です。良ければご一緒に」、ドミンゴが心と魂に届けたい歌に選んだのは『ふるさと』であった。

新聞記事でもふるさとという言葉が目に入る。「両殿下、復興演奏会に」という見出しの記事「天皇、皇后両殿下は16日、東京都新宿区のホールで、東日本大震災の復興支援チャリティーコンサートを鑑賞された。クラッシク曲の演奏のほか、故柴田トヨさんの詩集の朗読や、

福島県立湯本高校吹奏楽部などによる復興支援ソング「花は咲く」の合唱が行われた。最後に出演者全員が『ふるさと』を合唱し、皇后さまも客席で口ずさまれた[13]。上記の記事に限らずふるさと関連の記事は枚挙にいとまがない。

皇后さまもドミンゴも復興を願う歌として『ふるさと』を歌われた。『ふるさと』は郷土愛を育む歌にとどまらず、祈りに近い応援歌として歌われたことがわかる。

6. ふるさと～嵐～から

下記の歌詞は嵐が2013年大晦日「NKH紅白歌合戦」で「歌がここにある特別企画」で紹介された。また、この曲は、希望を抱き、思いを表現しながら、前へ前へと進んでいく。そして新しい一歩を踏み出す勇気に変わってゆく。一人でも多くの子どもたちがそんな喜びに出会うように願いを込めたテーマとして、第80回NHK全国学校音楽コンクール小学校の部の課題曲になった[14]。また、Nコン用に歌詞が新たに書き下ろされ、さらに同声2部に編曲されている。

作詞をした小山薫堂は、「人生の時間に、中学校・高校・大学・就職・結婚・・・と名前を付けていくとしたら、小学校の時はふるさとだと思うんです。だからこの、今の時間を大切にしながら、一緒に歌っている仲間、こういう時間こそが自分のふるさとなんだという気持ちで、歌ってもらえるといいなと思います」[15]と、ふるさとは人生の出発点であり、ここから人生を歩んでいく大切な場所と時間なんだと、課題曲演奏へのアドバイスの中で述べている。

嵐は紅白歌合戦の中で「全国の小学生とふるさとという歌で繋がったこの1年、ふるさととはなんだろうということを改めて考えさせられました。そんな中、僕たちはふるさとを遠く離れてNコンの予選に参加した子供たちがいることを知りました。沖縄県南大東島。東京から1400km、沖縄本島からも400km離れている離島です。この島唯一の小学校、南大東小学校の5・6年生が、今回学校の歴史で初めてNコンに参加しました。みんな『ふるさと』を歌ってどんなことを考えたのでしょう。南大東島の子供たちに話を聞きたくて私たちは島へと向かいました。」と話をした。そこで嵐と大東島の子どもたちが一緒にふるさとを考える場面のなかで、大東島が好きなところは「自然がある」「祝い事があると村全体で祝うところ」。また、大東島には高校がないので、いったん高校は島を離れなければならないが、「卒業したら帰ってきたい」という。その理由は「自分のふるさとだから」「那覇に行ってから戻ってくる人が少ないから」「南大東島に帰って暮らしたい」「ずっと一緒にいたから寂しくなる」と児童たちはよく遊ぶ場所でふるさとに対する今の気持ちや考えを素直に表現していた映像が印象的であった。

フィールドワークを終えた嵐の感想は「南大東島の子供たちに会って気づいたのは、みんな自分たちの暮らす場所が好きだという当たり前のことでした。美しい自然に囲まれた南大東島、たとえそれが大都会であっても、どこであっても皆さんが暮らしている所は、それぞれにとって大事な場所だと思います。その場所のにおい、空気、一緒に暮らす家族、周りの友達や先生、そんな当たり前の日常こそ、実はかけがいのない日々なのかもしれません。そんな毎日に刻んできた足跡が、いつか自分のふるさとと呼べるようになっているのだと思いました。『ふるさと』という歌に改めて教えられた1年でした。それぞれのふるさとをそれぞれの心に思い浮かべて。」と、全国の子供たちの映像と嵐がコラボレーションした映像をバックに『ふるさと』を歌った。

歌詞には風景をうたい、懐かしい人の気配を感じ、一番自然で自分らしくいられる場所としてのふるさとがそこにある。特に東日本大震災後、ふるさとという言葉が視覚聴覚を通して私たちに投げかけてくる。

今の時代、ふるさとの心が求められている。何が大切なのかを探しているそういう時でもあるのではなかろうか。「みんな元気になろうよ」のメッセージがふるさとの歌には込められているのではなかろうか。

夕暮れ迫る空に
雲の汽車　見つけた
なつかしい匂いの町に
帰りたくなる
ひたむきに時を重ね
想いをつむぐ人たち
ひとりひとりの笑顔が
いま　僕のそばに

巡り合いたい人がそこにいる
やさしさ広げて待っている
山も風も海の色も
一番素直になれる場所
忘れられない歌がそこにある
手と手をつないで口ずさむ
山も風も海の色も
ここはふるさと

朝焼け色の空に
またたく星ひとつ
小さな光が照らす
大いなる勇気
何気ない日々の中に
明日の種を探せば
始まりの鐘が響く
今君のために

雨降る日があるから虹が出る
苦しみぬくから強くなる
進む道も夢の地図も
すべては心の中にある
助け合える友との思い出を
いつまでも大切にしたい
進む道も夢の地図も
それはふるさと
僕のふるさと
ここはふるさと

7. 誰もが持っている内なる郷土愛

尾道市立重井小学校の校長柏原知己先生に話を聞くことができた。

尾道教育委員会では、みらいプランというプロジェクトの一環として「ふるさと学習推進授業」を実施している。全校の児童がその地域、歴史、文化に興味関心を持つことを目標に掲げ、学年に応じた内容で取り組んでいる。それは、生まれ育った地域のよさを理解することで、住んでいる地域に誇りが持てるようになる、地域との関わりを深めることに繋がっていく、そして地域の人たちと積極的に関わったり、自分の考えを伝えることで地域の人たちとコミュニケーションがとれ、地域の心を育むことによりアイデンティティの形成に大きく寄与すると考えている。

また、東日本大震災後、東北出身の著名な人たちが「花が咲く」を応援歌として、「ふるさとの復興」を願い活動している様子がNHKで放送されている。「花が咲く」の作詞・作曲も東北出身者である。自分が生まれ育った場所に愛着と誇りを持った郷土愛が被災者に勇気を与えていることが映像から伝わってくる。

2014年8月30日に因島水軍祭りが開催された。そのイベントの1つとして、今年、本屋大賞受賞された「村上海賊の娘」の著者である和田竜が来因した。トークショのなかで和田竜は「貴重な資料を今日まで保存されていたので書くことができた。これからも郷土にある文化を理解し、誇りを持って守ってください。」と、「村上海賊の娘」誕生秘話を締めくくった。

上記に述べたように、学校で、地域で私たちはふるさとが自然に育つ素地のある環境の中で日々暮らしていることがわかる。このことは、すでに1930年頃から、ふるさと意識を醸成するため小学校には郷土科という授業が設けられ、郷土愛を育む素地があった[16]。上記に述べたことは、その延長上にあるといっても過言ではない。

体の中に、記憶の中に、心の中にふるさとは有形無形に語りかけてくれている。このことが、うたう『ふるさと』と一体になり、歌い継がれる要素となりえるといえないだろうか。

8. まとめ

『ふるさと』はどんなに時代が変わっても景観が変わっても、『ふるさと』を歌えば、そこには自分だけのふるさとが再現される。そんな歌なのである。国際宇宙ステーションで日本人初の船長を務めた若田光一さんが「青い地球を見ながら、（さいたま市の）母校の子どもたちが歌ってくれた『ふるさと』を聴くのはとても印象的だった」[17]と半年間の国際宇宙ステーション滞在の思い出を語った記事がある。宇宙から見れば地球がふるさとであり、地球を見ながらふるさとにおもいを馳せたことだろう。宇宙船の船長という大役を担いながら母校の児童が歌う『ふるさと』は応援歌だったに違いない。上記で述べた皇后さまもドミンゴも祈りに近い応援歌として『ふるさと』を歌われたことがわかる。

1914年当初、文部省が学校で児童に歌わそうと考えた意図とは異なり、あの3拍子の心地よいメロディーにのってうたわれる『ふるさと』に大きな意味がある。この先もおそらく日本人にとって心が落ち着く、癒される、初めて聞いてもどこか懐かしい、何も考えなくても無意識に口ずさんでいる心の琴線に触れる音楽なのである。そんな歌として静かに歌い継がれていくことであろう。

『ふるさと』は日本人の心にしっかりと根付き、先人が築いた大切な文化として歌い継がれていき、人生の応援歌として歌われることであろう。

参考文献

1）千葉優子、ドレミを選んだ日本人、2007、p.8、音楽之友社
2）福井直秋、尋常小学唱歌伴奏譜歌詞評釈、pp.15-16
3）尋常小学唱歌　第六学年用
4）渡辺裕、国民は歌う、2010年、pp.38-62、中公新書
5）池田小百合、池田小百合なっとく童謡・唱歌、http://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyo00okano.htm#furusato
(last accessed 2014/10/4)
6）中野敏男、詩歌と戦争、2012年、p.42、NHK出版
7）小森陽一、近代日本の文化史5、2002年、p.248、岩波書店
8）井筒清次、童謡唱歌の故郷を歩く、2006年、p.12、河田書房新社
9）宮島幸子、「さくら」を通して音楽アイデンティティを考える、単著、京都文教短期大学研究紀要、第52集、pp.155-160
10）猪瀬直樹、唱歌誕生　ふるさとを創った男、2000年、文芸春秋
11）朝日新聞、うたの旅人、2008年10月24日
12）金田一晴彦　安西愛子、日本の唱歌（中）、1999年、pp.56-57、講談社
13）日読売新聞、両陛下 復興演奏会に、2014年3月17日
14）NHK全国学校音楽コンクールホームページ、「小学校の部課題曲『ふるさと』作詞・作曲・編曲者の横顔」http://www.nhk.or.jp/ncon/music_program/2013kadaikyoku_e.html
(last accessed 2014/10/14)

15）教育音楽小学版、2013 年 5 月号、pp.32- pp33
16）成田龍一、故郷の喪失と再生、2000 年、p.22、青弓社
17）読売新聞、地球と「故郷」とても印象的、34 面、2014 年 7 月 30 日